

六甲山上「二つ池環境学習林」の保全整備と活用

堂馬英二（六甲山を活用する会）

1. 二つ池周辺のビオトープを環境学習林に

国立公園六甲山上の記念碑台から近畿自然歩道を西に10分足らず、二つの池を取り囲む雑木林一帯1.2haを「二つ池環境学習林」と名付けて、保全整備を続けている。狭い地域だが、人工林・アセビ密生林・多様な樹種の混生林・二つの池と小さな沢があり、変化に富んでいる。

近畿自然歩道沿いのササ刈りと植生調査、二つ池の水生生物の生態調査を6年続け、モリアオガエルの大量繁殖、ヒメボタルの生息、オオルリボシヤンマの飛来などを観察調査し、特色のあるビオトープであることが判明してきた。

地域特性や生態系についての記録やデータも蓄積し、これらの知見や情報を基に、様々な環境学習ができる景観設計を考えている。「小さな場所でも目を凝らしてみると、多様な世界が見えてくる」ことを強調していきたい。



六甲山上の「二つ池・上の池」

2. アセビ伐採による植生回復の調査

最近の2年間は、二つ池の東側の尾根筋で「アセビ伐採による自然植生の回復」を目指す実験調査を行っている。平成21年に、密生したアセビを伐採して落葉・広葉樹の成長を促進する目的で、環境省や神戸市から「木竹伐採の許可」を得た。第1期5M×5Mの6区画（西側に非処理の対象区6区画も設定）で84本を皆伐して大半を炭焼きし、伐採後の環境変化を定期的に観察している。平成22年は北側に第2期10M×10Mの4区画を設定した。アセビ140本を皆伐し炭焼き窯に搬入した。アセビ外の残置樹木の毎木調査を行い、環境変化も観察している。

六甲山上は、80年ほど前は薪炭林として利用されており、アセビも炭などに加工利用されていた。現在は放置山林化し、アセビが密生して多様な植生の生育を抑えているので、伐採の必要を提唱される識者も多い。アセビの伐採による環境変化の調査結果は、植生の多様化を促進するにはどの程度のアセビの間伐が有効なのか、といった検討に役立てられる。六甲山の自然環境の保全につながる客観的なデータを提供する意義は大きい。

3. 六甲山らしい自然林での体験学習・自由研究

明治以来、リゾート開発された六甲山上では伸び伸びと自然体験できる環境は希少である。自然に恵まれない山麓の小学児童が自然体験や環境学習のできるフィールドを創り出すことを目指してきた。「六甲山子どもパークレンジャー」として四季の環境学習に継続参加できる仕組みを考えて、年間5回の環境学習プログラムを運営している。対象地域にあるものだけを使って六甲山らしい学習を進めることを基本に据えている。

大都市近くの六甲山では、植物や昆虫の観察調査という理科的な学習から発展させて、地域環境や社会生活とのつながりも学習できる。二つ池周辺地域の生態研究はもとより、植生回復を目指すアセビ伐採の有効性も考察するような「自由研究」を実現したいと願っている。